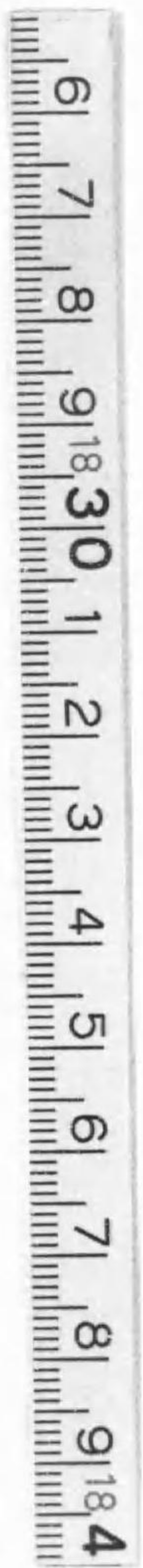


324

特217
495

精進寺

504
28
15
2



始



特 217
495



しよもせやま ちんか くのちん
妹背山婦女庭訓



妹背山婦女庭訓

目次

竹に雀の段	………	一一三
同 註釋	………	一一三
○	………	一一三
妹背山婦女庭訓筋書	………	一一四
挿繪	………	一一四
吉野山(口繪)——三笠山御殿(口繪)——妹背山(挿繪)——コマ繪		



白雲山

白雲山



三笠山御殿

藤原鎌足の家來金輪ノ五郎今國は辨の漁師鱈七となつて三笠山の御殿に入り込み、疑着の相のあるお三輪の血と爪黒の牝鹿の血を笛に塗つて、それを吹きますと入鹿は眠りましたので到頭誅に伏しました。

稽古本附義太夫名曲全集

妹脊山婦女庭訓

竹に雀の段

されば戀する身ぞつらや出るも入るも忍ぶ草露踏分て橘姫
すごく歸る對の屋の障子にばらり打つ礫ソリヤお歸りの
しらせぞとめいゝ庭につどひおりしをり開いて入れまる

妹脊山婦女庭訓

らせ、おいとしや、御所のお庭の内さへも、ついに拾ひな
されぬに、戀なればこそ、かちはだし、晝朝露でお裾も濡ん、小打
着に召せかへんと立寄て、

「ヤアお振袖に付て有る、此紅の絲不審」と、たぐりたぐれば
くるくると絲による身はさゝがにの、雲井の庭へ引れくる主
は床しの、

「ヤア求馬様か」ハア、はつと驚く姫よりも、騒ぎさゝめく局達
扱も見事引寄た、七年物の戀人様か、よふこそお入遊ばした、サ
ア、くこちへと手を取ば、

「イヤ手前はつい道通り、此をだ巻を拾ひ上るやいな、めつた

に引れ参つた者、何にも存ぜぬお赦し」と出る向ふを立ふさ
ぎ、

「エ、手のわるいなされ様、わたしらに御遠慮は、内々のお咄
しなら、どりやお次へ」

と立て行。姫はとかうの詞なく、差うつむいて思案の求馬
「フン此御所の姫とあれば、聞に及ばず、入鹿の妹橘殿」

といはれてはつと胸せまり「入鹿が妹と知給は、よもお情
は有まいと、隠し包しかひもなふ御存じ有しお前こそ、藤原の
淡海さま」といふ口ちやくと袂に覆ひ、「女なれど敵方に、我
名を知れば、一大事不便なれ共助けがたし」

『成程お道理御尤生て居る程思ひの種お手にかゝるがせめての本望かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が残る、サア殺して下さんせ』

と、刃を待たる覺悟の合掌。

『フン心底見へた誠夫婦と成たくば一つの功を立られよ』

『一つの功を立よとはへ』

『オ、入鹿が盗取つたるこそ三種の神器の其一つ、十握の御劔うばひ返して渡されなば望の通り二世の契約得心なれば叶はぬ縁』

『ハアぜひもなや悪人にもせよ兄上の目を掠るは恩しらず』

とあつてお望叶へねば夫婦と思ふ義理立たず恩にも戀はかへられず戀にも恩は捨られぬ二つの道にからまれし此身はいか成報ひぞと忍び歎いておはせしが、

『オ、そふじや親にもせよ兄にもせよ我戀人の爲といひ第一は天子の爲命にかけて仕おふせませふ』

『オ、出かされたり。シテ又しらせの相圖はなんと』

『今宵御遊の舞に事よせ寶劔奪ひお渡し申さん、笛や鼓の音をしるべ、奥の亭までお忍び有れ』

『しからは我此所にくるゝを暫し待合さん、かならず首尾よふ』

「合點でござんす。ガもし見つけられ殺されたらこれが此世のお顔の見納め、譬へ死でも夫婦じやおつしやつてくださりませ」

「オ、運命つたなく事あらはれ、其場でむなしくなる逆も、盡未來際ははらぬ夫婦」

「エ、忝い嬉しや」

といただきしめたる鴛鴦のつがひし詞縁の繩引別れてぞ忍ばる。

迷ひはぐれし片鶉草のなびくをしるべにて、いきせきお三輪は走り入、
「エ、此をだ巻の絲めが切くさつたばつかりで道

からとんと見失ふた、去ながら爰より外に家はなし、大方此内へ這入つたに違ひはない、エ、誰ぞこよかし問ひたや」

と見やる先よりお婢が被まぶかにしやなくと豆腐箱提げ歩來る。申々と呼かくれば、
「ッット呑込早合點」

「オ、お清所を尋るなら、そこをこちらへかう廻つて、そつちやの方をあちらへ取、あちらの方をそちらへ取、右の方へ這入て左の方を真直に、わき目もふらずめつたやたらにすつと行きや」

「イエ、く私が尋ねるのは、お清殿とやらではござんせぬ、年の比は廿三四で、色白にくつきりとしたよい男はまゐりませな

んだかへ』

『オ、く、く、来たげなく、それはお姫様の戀男じやげなの、三輪の里から跡追て来た所を、何がお局達が引とらへ、有無を云せず御寢所へくつと押込上から蒲團をかぶせかけく、ア、く、宵の中内證の御祝言が有筈と、くれぬ中から騒いでじや、エ、けなり、こちと迄内太股がぶきく、と、卯月あたりのはじけ豆、とうふの御用が急ぐに』と、しやべり廻つて出て行。『サア、く、く、ひよんな事が出来てきた、ほんにく、油断も透もなるこつちやない、大それた人の男を盗くさつて、何じやいし、こらしい内祝言じや、餘りな踏付やう、よい、く、其かはりど

こに居よふと尋ね出し、求馬様と手を引て是見よがしに逝でのけるが腹いせじや』

と、行んとせしが、『イヤ、くはしたない者じやと、ひよつとあいを盡されたら、といふて此儘に見捨て是がどふ逝れふ、エ、どふせふぞ』と、心も空、登る階長廊下、行こふ女中が見とがめて、一人が留れば二人立ち、三人四人いつの間に、友呼千鳥むらくと爰かしこから寄たかり、

『ついし見なれぬ女子じやが、そなたはマア誰じや何者じや』
『ハイ、く、イヤ、私は内方の、オ、それよ、さつきのお清殿は寺友達、奉公に出られてから、久しう逢ぬなつかしき、ちよつと見舞

に寄よましたら、是こゝはマア、よく来た、上あれ茶々吞の、そふしてたばこ吞の、アノお上あには、あためつそふな、御祝言のが有あると、聞きけば聞程の涙ながこぼれて、あたおめでたい事ことじゃげな、ほんに内方のの様ようなよい衆しゆの御祝言のは、どの様ような物ものじゃ、己おのやれ拜まんでなりと腹はらいよと、うかく、爰迄こゝ参まりました、どふぞおまへ方かたのお心こゝろで、掣ひ様さまをちよつと拜ままして貰もらふたら、忝かたじけなふござりまする』

といふ顔かほも、恨色うらみいろ成な紫むらさの、ゆかりの女おんなと早悟はやさとり、なぶつてやると目引袖引めひきそでひき、

『マア、くそちは仕合あせな、かういふ折せきに参まり合あせ、お座敷拜ざしきまゐりむと云いふ事は、女おんなの身みでは手てがら者ものしたが、こちらが吞込ののこでお

座敷へは出す物の、何なんぞさ、ずばなるまいに、何なんと皆様みなさま、いつその事こと此者このものに酌取しやくとそでは有あまいか』

『よからうく』

『ア、申まを、其酌そのしやくとやらは』

『オ、何なんの又またそち達たちが知してよい物ものか、今いま爰こゝでをしへてやろ、幸さいはひ爰こゝに御酒宴のの銚子島臺てう、有合あひの掣ひ君きみ様さまには、紅葉あきばの局つね、梅うめの局つねは、嫁君役よめぎやく、残りのこりは介添待女せいたまご、嫁君よめぎみ、

と櫻さくらの局つねが指圖さしずして、いやがるお三輪さんりんに、長柄ながえの銚子持てうしもち、せ持せもちと添そ、

『マア、盃さかづきは三ツ重さんね、嫁君よめぎみへ二度にどついで、左ひだりへ二足ふたあし、コレ立たのちや、

エ、何じやいのうかくせずとよふ覺や、三度目ついて、
君へ、コレ酒がこぼれるはいのふ不調法な。是からが亂酒
諷ひ物、これも嗜みなければならぬ、サア四海浪なと諷やいの』

『エ、』

『エ、とはいやか、そんなら、
君様拜ます事はマアならぬ、サ
それがいやなら早ふ諷や』

とせつき立られ、是がマア、何と千秋萬歳の千箱の玉の血の
涙聲詰らせてないじやくり、

『オ、めでたふ哀に出来ました、色直しにはんなりと、梅が枝
でも、落組でも、サア、聞きたい所望じやく』

『エ、あられもない事おつしやりませ、山家育の藪鶯ほう法
華經も片言斗上り下りのあだ口や、馬士の歌なら聞ても居よ
ふ、もふ何事もお赦しなされ、サ早ふ其君様に』

『サア、君様が見たくば早ふ諷や、馬士の歌なら面白からふ、次
手にふりも立て仕や、いやならこつちも成ませぬ、歸りやかへ
りや』

と引出され、

『サア、何のいやと申ませふ』

『サ、そんなら歌や』

『アイ、歌ひまする』

と泣々も涙にしぼる振袖は、鞭よ手繩よ立上り、歌竹に、雀はナア、品よくとまるナ、とめてナ、とまらぬナ、色の道かいな「ア、ヨ、エ、爰なほてつ腹めと此やうに申まする」

と打伏せば、皆々一度に手を打て扱もきつい嗜事、よい慰で我々がほてつ腹迄よれました、馬士殿太儀と言捨て、行を驚き、コレ申わたしも俱にと取すがれど、ふり放されてはがはとこけ、寝ながら裾にしがみ付引ずられて聲を上げ、「のふ皆様お情ない、どふぞわたしも御一所に連れてござつて下さりませ、お慈悲〜」

と手を合せ、拜廻るを擲退け、「オ、しつこ、逆も及ばぬ戀争

ひ、お姫様と張合ふとは、叶はぬ事じや置てたも、大膽女のしつけをせふ」

と、耳を引やら脇明より手を指入れてこそぐるやら、つめりつた、いつ突倒し、

「チア〜、これで姫様の格氣の名代納つた彌めでたい御祝言、三國一ぞや、鞆取濟したしやん〜、しやんと濟だと打笑ひ、局々へ入跡は、前後正體泣倒れ、暫し消入居たりしが、

「エ、胴慾じやわいの〜、男は取れ其上に、まだ此様に恥かゝされ、何ところへて居られふぞ、思へば〜、つれない男憎いは此家の女めに、見かへられたが口惜い」

と、袖も袂も喰裂く、亂れ心の亂れ髪、口にくひしめ身をふるはせ、

「エ、妬しや腹立や、おのれおめく寝さそふか」

とすがた心もあらしく、かけ行向ふに以前の使者、

「エ、そなたも邪魔しに出たのじやな、もふかうなつたら誰出ても構はぬく、そのきや」

と、袖すり抜てかけ入裾、しつかと踏へ、

「コリヤ待て女」

「イヤ待ぬ、爰放しや、放しやく」と身をもがく、髻つかんで氷の刃、脇腹くつと差通せば、うんとにつけに倒れ伏す。刀は

突捨て、あたりを窺ひ目を配る、奥は豊に音楽の調子も秋の哀なる。お三輪はむつくと起返り、

「扱は姫がいひ付じやな、エ、むごたらしい、恨はこちから有物を却てそちから殺さする、心は鬼か蛇かいやい、オ、殺さば殺せ一念の生かはり死かはり付まとふて此恨晴さいでおかふか、思ひ知や」と奥の方、にらみ詰たる眼尻も、叫ぶこはねも、うはがれて、さもいまはしき其有様、じろりと見やり、

「女悦べ、それでこそ適高家の北の方、命すてたる故により、汝が思ふ御方の手柄となり、入鹿を亡す術の一ツ、オ、出かしたなア」

『何と賤しい此身を北の方とは』

『ホ、ヲそちがかたらひ申せし方は忝なくも中臣の長男淡海公』

『エ、シテ又私が死るのが、いとしいお方の手柄に成て、入鹿を亡す術とはへ』

『ホ、其譯語らんよつく聞彼が父たる蘇我の蝦夷、齡傾く比迄も一子なきをうれへ、時の博士に占はせ白き女鹿の生血を取、母に與へし其しるし、健かなる男子出生、鹿の生血胎内に入を以て入鹿と號く、去によつて、きやつが心をとらかすには、爪黒の鹿の血汐と、疑着の相有る女の生血、是を混じて此笛に

そゝぎかけて調ぶる時は、實秋鹿の妻乞ごとく、自然と鹿の性質あらはれ、色音をかんで正體なし、其虚を斗つて寶劍をあやまちなく奪ひ返さん鎌足公の御計略。物かけより窺ひ見るに、疑着の相有汝なれば、不便ながら手にかけてしと、件の笛の六穴に、たばしる血汐請そゝぎく、今こそ揃ふ此幻術、此笛こそは入鹿を挫ぐ火串ならん、ハ、ハ、ハ、ありがたやと押いたゞき、勇立たる其骨柄、實藤原の御内にて金輪五郎、今國と鍛へに鍛へし忠臣也。

『なふ冥加なや勿體なや、いか成縁で賤の女が、そふしたお方と暫しでも、枕かはした身の果報、あなたのお爲に成事なら、死

でも嬉うれしい忝かたじけない。とは云い物の今いま一度ひとどふぞお顔かほが拜まみた
 い譬たと此こ世よは縁えん薄うすくも未あ來らいは添そて給たまはれ』と這ま廻まる手てにをだ
 卷まきの此こ主ま様さまには逢あれぬかどふぞ尋たづねて求もと馬ま様さまもふ目めが見みへ
 ぬなつかしい戀こし〜と言い死しに思おもひの玉たまの絲いと切きしをだ卷まき塚づか
 と今いまの世よ迄まで鳴な響びたる横よこ笛ふエ堂どうの因いん縁えん斯ごとと哀あはれ也なり。今いま國くに不ふ便べんい
 やましにせめて葬ほうり得えさせんと背せまにお三さん輪りんが亡な骸がを追お々々馳はり
 る荒あしこ共とも曲まが者ものやらぬと取と卷またり。見み向むかもやらす悠ゆう々々と几
 帳ちやうの綾あや絹ぬい引ひちぎり死し骸がと俱ともに我わが五ご體たいぐる〜しつかと引ひ結むす
 び。

『死し人にんを取と置お我わが等らこそ先ま出で來き合あの坊ぼく主ま役やく十じゅう念ねん授おけてこまそ

ふにもつど〜には邪よこ魔まらしや一度ひとにかためて授おるがうぬ
 らが爲ためには百ひゃく年ねんめいざこいやつ』と力ちから士し立たち。

『マア廣くわう言げん成せ骨こつ佛ぼつ』

と前ぜん後ご左さ右うより十じゅう文ぶん字じ鎗や先ま揃そろへてつき出いす。ひらり早はや業わざ
 すつかり素す鎗やほぐれるかた鎌かま踏ふみ落おせば後あとをつく棒ぼうしつかと
 とりしりへをねらふは不ふ敵てきやつ左さ様ように味あじふはさす股またも引ひた
 くつて打うち折おたり。手て取とにせよとどつと寄よるあたるを幸さいひ砂すな
 石いしの如ごとくほり飛とばされ迹あと行ゆくやつ原はら餘あまさじと奥おく深ふかくこそ三さん重じゆう
 追おて行ゆ。

竹に雀の段註釋

〔對の屋〕 中古の家造りにて禁中貴人等の邸に、寢殿と相對して兩側又は後に別に造りたる離座敷。

〔しをり〕 柴折戸。木ノ枝又は割竹などにて造りたる扉。

〔お拾ひ〕 「庭の内さへもついに拾ひなされぬに」▲徒歩にて歩くこと。

〔小打着〕 小挂。中古の貴婦人の着物の一種。小袖に似て、上より打かけて着る。

〔さゝがにの〕 「――の雲井の庭へ」▲さゝがには蜘蛛の異稱、及び蜘蛛の枕詞で、蜘蛛と雲とは同音であるから洒落て使つたものか、それとも間違へて使つたものであらふ。雲の枕詞ならば「久方の」と附けなければ成らぬ。

〔雲井の庭〕 御所のお庭。雲井とは禁中のこと。

〔さよめく〕「騒ぎさよめく局達」▲言ひ騒ぐ。さんざめくこと。

〔七年物〕長いこと待受けてゐた物。滅多に手に入らない物。

〔手のわるい〕——なされ様▲ひとが悪い。ずるい。

〔とかう〕「姫は——の詞なく」▲何とも言ひ得ないで。とかうは兎角。

〔つがひし詞〕「いだししめたる鴛鴦の——」▲約束した詞 求女と橘姫とを鴛鴦に譬へて二人が言ひ交したといふ心。

〔被〕かづき。中古、上流の婦人、又は御所に奉仕する女が外出の時に着た薄い布。頭から上半身を被ふて、顔の所で合せる。

〔お清所〕 廁。便所。

〔けなり〕「エ、けなり」▲變な氣持がする。

〔卯月〕 陰曆四月。「内太股がぶき」と卯月あたりのはじけ豆」▲卯月と疼きを懸けた詞。

〔ひよんな事〕 思ひがけない事。大變な事▲「サアくくく——」が出來て來た。

〔大それた〕 ぶらぶらしく。厚かましく。

〔寺友達〕 寺子屋朋輩。一緒に寺子屋へ通つた友達。

〔待女郎〕 婚禮の時に新婦に附添ふ腰元。

〔亂酒調ひ物〕 酒に酔ふて歌ふ唄。

〔ないじやくり〕 すゝり泣くこと。

〔あられもない事〕 あり得べくもないと云ふ意味ですから、「飛んでもない事」「滅相な事」とでも解したら宜しいでせう。

〔ぼてつ腹め〕 馬士の馬を叱る言葉。

〔うはがれて〕 「にらみ詰たる眼尻も、叫ぶこはねも——」▲上ずるなど云ひて、逆上せて生氣を失ひたる状態。

〔疑着の相〕 執着の念の深い相。

〔几帳〕 臺に柱があつて、これに布のとばりを垂れ、坐側に置いて外から見えないやうにした物。中古、貴族の婦人が用ひたものです。

〔十念〕 南無阿彌陀佛の名號を唱へること。

〔つどく〕 「つどく」。

〔さす股〕 棒の先に、金屬製の股を付けて、人を取押へるのに用ひる道具。物干に使うさんま
たと同じ形式の物。▲「しりへをねらふは不敵やつ、左様に味ふはさす股も」この本文はし
りへ（尻）とさす股の股とに縁を結び、さううまくは爲せないといふ意味でさす股を使つて
あるのです。

しりへをねらふは不敵やつ
味ふはさす股も

解附
古本 義太夫名曲全集

妹脊山婦女庭訓

解題

中臣の鎌足が入鹿を誅戮した歴史に、封建時代の義理人情を絡ませたもので、丸本は五冊讀きであるが、三冊目と四冊目とが最も秀れた出来栄である。作者は近松半二、松田ばく、巽善平、近松東南で三好松洛が後見といふ事になつてゐる。明和八年正月二十八日の出版である。

この淨瑠璃には大和の名所舊蹟や傳説などが較や上手に取り入れられてゐる。外題の妹脊山は大和の妹山、紀伊の脊山を背景にして「山の段」を冠せて、鎌鳥とお三輪と構娘とを貞女または節婦の中に算へて、それで「婦女庭訓」としたのである。

當今歌舞伎芝居のだし物としては山の段と道行と御殿と此の三つだけが上演されてゐる。

妹脊山婦女庭訓

内裏

天智天皇はお眼を煩ふて先頃よりお引籠りでございます。然るに輔弼の臣として左右に侍座すべき中臣の鎌足公は聊か思ふ仔細有つて虚病を構へまして、久しく出仕を怠つて居りますので、蘇我の蝦夷は結句それを仕合せには思つてゐるけれど、表面は飽くまでも忠義に見せかけて、目の上の瘤である鎌足公を君側から遠ざけてしまひたいと思ひ、あの鎌足は何か謀叛の野心でも有るらしいから、お呼出しになつて、篤とおしらべに成らなければ不可せんと申上げて、帝のお許しを得ましたから、敕諭によつて鎌足に参内を促しました。

玉座の左には蘇我ノ蝦夷、右の座には安倍中納言行主が控へて居ります。庭上には大判事清澄、蝦夷の家來宮越玄蕃など文武百官何れも威儀を作つて居ります所へ、太宰ノ少貳の後室貞高といふ夫人が出仕を致しまして、武官の方に取次を申入れましたのは、夫少貳、逝りまして

から五十日の忌明も済みました事ですから、家名相續の爲娘雛鳥の婿選びを致したいと存じまして、お許しを賜はりたいとの事。大判事は武官の職でございますから取敢ず申次を致すべきであります、大判事清澄と故太宰ノ少貳とは仲違ひの間柄でございますので、遠慮をして、宮越玄蕃に取次を致させますと、玄蕃は前々から雛鳥を宿の妻に迎へたいと望んで居りましたので、これを好い機に其の縁組を定めて貰はふと致しましたので、貞高は、こんな奴を婿に選ばれては大變ですから、當惑して居りますと、中納言行主は氣ノ毒に思ひ、「イヤそれは、追つて敕諭を給はるであらふから、それまでお待ちなさい」と言つてくれましてので、ほつと息を吐いて御所を退りました。

それから程なく鎌足が参内いたしました。中納言行主は席を鎌足に譲ります。蝦夷は鎌足に向ひ、病氣を言ひ立に参内を怠られたのは甚だ不都合であると云つて、家來の彌藤次に云付けて一つの箱を持つて來させます。

箱の中には一丁の鎌が入つて居りました。この箱は五日程前に春日の社殿へ埋めて置いたもので、何者が埋めたのかは知らないが、中に男子誕生平天下と書いてある所を見ると、これは鎌足公の所業であらふと思ふ、何となれば、今上の御寵愛一方ならぬ采女の局は、即ち鎌足公の息女であるから、皇子御誕生の上は取も直さず外戚の父君に當るので、さうして天下を我が物顔に爲ようと云ふ野心から、家の寶である鎌の模造品を作つて、即ち影の鎌を作つて春日明神へ祈願を籠めた謀叛の兆あるものと言はれても仕方は有るまいといふ。

勿論根も葉もない事であるから、それを打消すのは何でもない事であるが、敢てそれを言ひ解かふとは致しませんでした、といふのは深い考への有ることで、これは畢竟何者か工んだ事であらふから、その本人を突止めるまで暫く塾居を致しますからと云つて座を起ちましたから、采女の局は残念に思ひ、なぜ申し開きを遊ばさないのかと云つて切りに止めましたけれど、耳にも入れません、悠々として御所を退出いたしました。

春日神社

時雨がしとく降つて居ります。こゝは春日神社の境内であります。露に濡れた松林の彼方から、一人の侍が出て來ました。その侍は蓑を着て笠を被つて、吹矢を持つて居ります。小禽を捕りに出たものでありませうが、その目鼻立の美しい事と云つたら天女を男にした様な美少年であります。この美少年は大判事清澄の伴、久我之助清船でありました。ちよつと雨止みをしてゐる間、床几に腰を掛けて居ります。

本社の方より下向して來た一群の女があります。それは太宰の少貳の息女雛鳥と其の腰元達であります。これも繪に畫いたやうな美しい娘でありますが、ふと久我之助の姿を見まして、あんな綺麗な男が有るものか知らと思ひまして、此儘通り過ぎてしまふのが残り惜いやうに感じました。腰元達は姫の素振を見て直ぐに察してしまひまして、こゝは誠に景色が宜しうござ

いますから、少しお休み遊ばしては如何、あすこに面白さうな物を持つてゐる人が居りますから借りてまゐりませうと云つて、久我之助の傍へまゐり、あなたのお持になつてゐらつしやるのは遠目鏡でございませうが、一寸拜借を願へませんか、イヤこれは遠眼鏡ではありません、吹矢筒でございませう。アラマア吹矢でございませうか——と云ふやうな事から直き心安くなつて、二人を無理やりに押付けてしまひましたから、何方も若い同士で恥かしがつて居ります。



遣つてまゐります。代參の戻りだつたのですが、ふと見ると松の小蔭に雛鳥が居ります。此方には久我之助がゐて、床几へ腰を並べて睡ましたさうに嘸いて居りますから、むか——と致しま

蝦夷の家來宮越玄蕃は供を連れて向うから

したが、少時様子を見てやらふと思つて、挾箱へ腰を卸して、そつと覗いて居りましたが、二人が餘り戯け散すので、我慢しきれなくなつて飛出しましたから、久我之助も雛鳥も恟り致しまして、雨宿りをしてゐたのだと言譯をいふ。
「ナニ、雨宿りなら雨宿りで宜いが、その雛鳥は自體、身共の嫁に迎へる筈で、上へお願ひをしてあるのだと申しますので、久我之助も雛鳥も二度恟り致しましたのは、お互ひに顔を知りませんでしたから、それが雛鳥であり、これが久我之助であらふとは氣が付きませんでした。もと／＼仲違ひしてゐる家柄でありますから、親々へ對して相濟まぬ事であつたと二人は後悔いたしました。

玄蕃は圖に乗りまして、腰元達にあの雛鳥を取持て／＼と云つて煩さくせつ付きますので、腰元達はからかひ半分に吹矢筒を持つて來て、玄蕃と雛鳥とに耳こすりを爲せる振をして、フツと矢を吹きましたから、玄蕃の耳の穴へぐさりと刺さつた。

「アイタ／＼何をやる！」

まご／＼して矢を抜いてゐる隙に、腰元達は雛鳥の手を引いてドシ／＼逃げてしまふ。玄蕃は怒つて見たものゝ、高が女の悪戯ですから仕方はない、ブツ／＼口小言を云つて居ります。

大勢の人音がする御所の侍達が駈付けて來ました。何か大事件が出來したに違ひない。

ま「何うしたんだ」

久「……………!？」

采女の局が禁廷を脱け出して、何處へか行つてしまつたのだ。「それは大變だ、早速お上へ知らして來よう」と云つて玄蕃は飛んで行つてしまふ。侍達は出口／＼へ分れて行く。久我之助は局の傅役ですから責任が有りますので、困つた事が出來たと思ひまして思案にくれて居りますと、誰やら人の來る氣配がするので、物蔭に忍んで居りますと、それは采女の局でありました。局は久我之助に向ひ、蘇我の蝦夷は、自分が帝の御寵愛を受けてゐることを妬ましく思ひ、

己が娘橘姫を後に立てようといふ野心が有つて、いろ／＼善くない事を企みますから、自分が居りましては却て帝のお爲に宜しくないと存じまして、潜かに御所を脱け出して、父鎌足の許へ身を寄せようとするのであると申しますから、却てこゝは見通した方が天子のお爲であると思ひ、自分の着てゐた簑笠を脱いで局に着せまして、侍達の目を掠めて、何處へか落してしまひました。

三條の御所

蝦夷の館を三條の御所といつて、庭も建物も善美を盡して居ります。今日は雪見の亭で酒宴を開きました。宮越玄蕃、荒卷彌藤次など歴とした侍が、庭へ下りて、雪人形を拵へたりして酒宴の興を助けて居ります。

大判事清澄の伴久我之助清船が御所へ伺候いたしました。何か用事が有るといふので蝦夷か

ら呼寄せられたのであります。この清船は美男である上に、今日は衣裳を着飾つて居りますから、四邊が眩しい程立派な押出しであります。

蝦夷は清船に向ひ、采女の局は大内を抜け出して行方知れずになつたが、聞けば猿澤の池へ身を投げたとの話である、それは本當の事かと尋ねます。實は身を投げた事にして他處へ隠してあるのですが、殊更尤もらしい貌をしては、然様でございませと悲しげに答へましたので、采女が居りませんければ、自分の娘橘姫を後に立てることが出来ますので、蝦夷は悉皆安心を致しまして、「ヤ、御苦勞、併しお前は局の傅役であるといふのに、局の失踪を知らずにはゐると云ふのは甚だ手ぬかりであると云つて父親から勘當を受けたと云ふではないか。して見れば扶持放れの浪人者であるのに、禮服を着飾つて來たのは何ういふ譯であるか」と不審を打ちました。「いや私は親にも離れ扶持にも離れましたに就いて、蝦夷公へ御奉公を願ひたいと存じまして、お目見得旁參上いたしたのである」と申しますので、蝦夷は久我之助の武藝を

試さふと思ひまして、玄蕃と彌藤次に目配せ致しましたから、二人は突然切つて掛りました。久我之助は悠々として二人をあしらひまして、庭の飛石を取て、エイと切尖を受けますと、あら不思議や御殿の天井から金網がスル／＼と下りて來る、飛石を庭へおろすと、またスル／＼と天井へ上つてしまふ。かう云ふ仕掛をして置くのは何れ悪い工みがあるに相違ありません。清船はニッコリ笑ひまして、蝦夷に對つて一禮を致しましたから、飛んでもない物を見られたと思つて後悔いたしました、最早お前は身内も同然であるから鳥渡見せてやつたのだと瞞かして丁ひました。

蝦夷は一天萬乗の位に登らふといふ野心が有りますので、子息の入鹿は父の惡逆を憎みまして、命を捨て、諫めようと思ひ、穴を堀つて自分から棺の中に入り、毎日鉦を鳴らして念佛を唱へて居りましたが、今日が丁度満願の百日になりますので、愈々入定して相果てますと云ふので、夫人のめどの方は泣きまみして、蝦夷に絶りまして、夫の入定を止めて下さるやうにと

嘆きましたけれど、あんな愚者は何うなつても構はんと云つて少しも取合つてくれません。「ナ
ンダ、酒の席へ来て泣く奴があるか」と云つて腹を立てましたが、娘の橘姫が取做してくれた
ので機嫌を直して、別の席で酒盛を爲ようと思つて、奥へ行つてしまひます。

橘姫はめどの方を慰めまして、此上は天子にお縋り申すより道はないから、是から直ぐ参
内を致しますと云つて、奥の用意を命じました。

地の底で幽かに鉦の聲が聞えます。あの鉦の聲が絶える時が、夫の命の亡る時ですから、め
どの方の心配は一通りでありません、雪の中に坐つて連と祈念を凝して居りますと、奥から蝦
夷が出て來まして、入鹿に渡して置いた連判状は何處へ藏つてある、お前は夫婦の中で其れを
知らぬ事は有るまいと云つて、刀を抜いて脅かしましたが、白状いたしませんから、一太刀浴
せますと、めどの方は懐に隠してゐた連判状を火鉢の中へ投込みますと、見る／＼燃上りまし
て、館の四方に當つて攻太鼓がとう／＼と鳴り響く。「さては汝、内通しをつたナ」と腹立たし

げに刺殺してしまひます。めどの方は中納言安倍の行主の娘ですから、どの道助けて置く譯に
は行かなかつたでせう。

そこへ思ひがけず勅使が下りました。時も時、勅使とは合點が行きませんが、何しろ勅使と
あれば衣冠を更めねばなるまいと云ふので、直ぐ支度をして出迎へました。

勅使に立つたのは中納言行主と大判事清澄とで、入鹿へ渡して置いたと云ふ眞物の連判状を
突付けて、到頭詰腹を切らせてしまひます。

何處からか矢が一筋飛んで來まして、中納言行主の胸板を突通しました。正面の襖を開いて
悠然として現れましたのは誰あらふ入鹿でありました。髭はぼう／＼と伸び、髪をおどろに振
り被つて、白衣を着けた形相の怖ろしげな事。追の大判事も思はず吃ツとして立竦みました。

入鹿は佛法に歸依したのでも何でもありません、父の蝦夷に輪をかけた程の逆賊でありまし
たから、蝦夷の器量を見くびりまして、その自滅を待つて己が取つて代らふといふ野心であつ

たのです。

それで入定するやうに見せかけて、御所の寶藏下まで穴を堀つて村雲の劔を奪ひ取つて了つたのです。曲玉と八咫ノ鏡とは何處へ行つたのだから行方が知れません。

勢ひ已むを得ずして大判事も一たびは入鹿の臣下となりました。

十 三 鐘

帝は采女の局が猿澤の池へ身を投げたといふ事をお聞きになりました、悲しみの餘り鳳輦に召されて、池の畔までお出ましになり、さめくと泣いて居ります處へ鎌足の嫡男淡海がまゐりまして、帝へお目通りを願ひました。淡海は節會の折に神禮の式を過つて勅勘を蒙り、それ以來浪々の身となつて市中に暮して居りましたが、蝦夷の謀判の事を聞いて、他所ながらお力に成らふと思ひ、潜かにお跡を慕うてまゐつたので有ります。

帝は大層お悦びになりました、もとの官位を授けましたから、淡海は天にも昇る心持で、皇恩の忝なさを拜謝いたしました。然るに其の喜びも忽ちにして手の裏を反すやうに、言ひ知れぬ哀みと變りました。

何事が出来たのですか。

折から砂煙りを揚げつゝ、駈付けて來ましたのは禁廷の勤番使であります。今日、勅使として中納言行主と大判事清澄とを三條の御所へ遣はして蝦夷に腹を切らした處、入鹿は打つて變つて悪心を起し、村雲の劔を奪ひ取り、大内を散々に荒し廻り、これを支へんとした者は大半打殺されて了つたといふ知せでありますから、帝の驚きは一通りでありません。抑々何の科によつて斯程までに天の憎しみを受けるのであるかとお嘆きになりますので、淡海はお氣休めのため一計を案じまして、官女に耳打を致し、鬼も角も内裡までまゐつて様子を見て参りませうと云つて、程近い所に退き、やゝ時を移してから、わざと足音を爲せまして、只今御所の騒ぎを見

肩けにまゐりましたが、國々の武士が蝦夷父子の悪逆を憎み、四方より兵を起して、大内へ攻寄せ、忽ちにして入鹿は誅せられましたと申上げましたので、帝は漸く御安心遊ばされましたが、何せいお目が見へないので、お側の者の申上げる事は、總て本當であると思召すのでございます。

そこで還御といふ事になりましたが、さて何處へ何う御案内をして好いか分りません、公卿や官女たちは途方にくれて居りましたが、中臣の家來で玄上太郎といふ者が浪人をして、獵人になつて居りますので、一先づ其處へ御案内をする事になりました。

玄上太郎は名前を芝六と更へて、獵人を渡世に致し、女房と子供二人とを養つて居ります。心から落魄れた譯では有りませんが、再び世に出たいと思つて居ります處へ、淡海よりの頼みではあるし、それに至上をお匿まひ申すと云ふので、夫婦してまめ／＼しく働きました。併し獵人の家へ天子様がお成になつたのですから、その不自由さ加減と云つたらぬ。公卿は悠々閑

々としてゐるし、官女達は長い袴を引摺つてゐるし、何うにも法返しが付きませんから、古着を買つて來て宛がふやうな始末。それでも天子様はお氣が付きませんで、こゝが常事殿であるかとお尋ねになりました。

それよりも困つた事は、主上の御機嫌の好い時に、百官有司の方々は皆揃つてゐるかとのお尋ねでありますから、残らず揃つて居りますと申上げたら、それでは管絃を催すやうにと仰せ出されたので、一同當惑いたしました。管絃では珍らしくないから、私が面白い物を御覽に入れませうと云つて、芝六は萬歳を踊つて見せましたので、主上は殊の外御満足であらせられました。

かうして世を忍んで居る間にも、淡海は入鹿を亡すべき方便をめぐらしましたが、先づ入鹿を調伏しようと掛りました。それには爪黒の女鹿の血を絞り取らねばなりませんから、芝六に言付けましたが、實は鹿を捕ることは固い法度でありまして、過まつて殺してさへ重い仕置に

逢はねばなりませんから、命懸の仕事でありませう。

もとより天子のために働かふと云ふのですから命など惜んでは居られません。今年十三になる惣領の子の三作を連れて山々を探ね廻り、ヤツと爪黒の女鹿を見付けまして、一矢に射て取り、そつと擔ぎ込んで來ましたから、誰も知る筈はないのに、鹿を捕つた者がある、それは多分獵人仲間であらふと云ふので、殿しい詮議が懸りました。

三作は親思ひでありますから、父の身を案じまして、かう詮議が殿しくては兎ても通れられないと見極めまして、自分が身替りに立たふと思ひ、七歳になる、杉松といふ弟に手紙を書かせまして、興福寺の寺中まで持たせてやりました。「御法度の鹿を殺したのは私の兄の三作であります」といふ訴狀なのです。芝六の妻お雉は三作を連れて後添に參つたので、義理のある父親ですから其の恩に報ひたいと思ひまして、鹿殺しの罪を身に引受けたのであります。

芝六が庄屋から戻つて來て間もない事、大勢の役人がドヤ／＼と押掛けて來ましたから、これは的切鹿殺しの詮議であらふと思ひましたが爾うでは無く、お前の處には高位の方が匿つてある筈だから、包まずに差出せといふ。常談いつちやア不可ません、こんな見をぼらしい家へ高位の方なんぞお匿ひ申す譯が有りませんと云つて、白状いたしませんから、傍にゐた三作を取つ捕まへて、刀を咽喉へ突付けましたから、芝六も觀念致しまして、いかにもお匿ひ申してあるが、こゝでは無い、詳しい事は大庄屋へまゐつてから申上げますと云ふので、引立てられて行きました。

淡海は此の様子を見まして、こゝも早や危くなつたから今の内に立退ふと申しますので、お雉は驚きまして、玄上太郎に限つて左様な陋しい料簡はございません、兎も角戻りを待受けませう、其上で若しも迂散な角がございましたら夫とは云はせません、只一打に致しますと言ひ切りますので、それでは少時待受ることに致さふと云ふので、立退くことだけは沙汰止みになりました。

杉松の訴へにより興福寺の坊さんや鹿役人などがドカドカとやつてまゐりまして、有無を言はず三作に繩を掛けましたから、母は驚きまして種々嘆願いたしましたけれど、確な證據があるのですから何うする事も出来ません。自分がお仕置になつたと聞いたら、父は怎麼に嘆か知れないから、何處へか奉公に行くと云つて出ましたと云つて置いて下さい、さうして杉松を可愛がつてやつて下さいましと呉々も言ひ残して、振返り／＼引立てられて行きました。

昔から春日の鹿を殺した者は、石子詰と云つて穴を掘つて、生きながら埋められるのであります。これを大垣の刑とも云ひます。その管轄は興福寺の手にあるのですが、今宵は寺中に法事が有りますので、明方の六刻に處刑をする事になりました。

お雉は居ても起つても居られませんが、外へ出て泣倒れて居りますと、芝六は酔ッ拂つて歸つて來ました。大庄屋へ行つて種々吟味を受けたが、巧く嘯かして來たと云つて好い機嫌で居りました。お雉は何として眠られませう。何時までも／＼夜が明けなければ宜いと思つて居

りますと、はや六刻になりましたか、ゴーン、ゴーンと撞出す興福寺の鐘！あの鐘を合圖に三作は生理になるのだ！母は氣も狂ふばかりであります。

その時、杉松を抱いて寝入てゐた筈の芝六は、杉松の咽喉を突刺しましたから、お雉はアツと驚きまして、何うした事かと責め尋ねますと、最前身共を引立てにまゐつたのは役人ではなくして、鎌足公からの廻し者であつた、それと云ふのも己の本心を疑ふからの事である、最前役人共が來た時己の腰が弱く見へたのは子供の愛に引かされたのではない、あの三作は樂官泰ノ益勝の伴で、お前の後添に來たので義理のある子供であるから見殺しには出来なかつたのであると申しましたので、お雉は耐り兼ね、それ程大切にして下さる三作は、鹿殺しの科でお仕置になるのだと聞きまして、芝六は仰天しまして、三作を殺しては耐るものかと云つて、お仕置場へ駆付けようと思つたと、明六つには必ず遣つて來ると云つた中臣の鎌足公は、「玄上太郎暫く待て」と云つて、彼方の岩蔭から悠然として現はれました。

鎌足の右の方には采女の局が内侍所(八咫の御鏡)を奉持して居られます。左の方には三作が上下を着けて威儀を正して居りますから、夫婦の驚きは一通りでない。生きてゐて呉れたのかと云つて、母は取絶つて泣きました。

實は昨夜、三作を生理にすると云ふので穴を掘りますと、土中から出て来たのは八坂瓊の曲玉と八咫ノ鏡とであります。これと云ふのも三作の孝心を天が感じたものであらふと云ふので、罪を赦されたばかりでなく、侍に取立てられました。神璽と内侍所とは蝦夷が隠して置いたのであります。

けれども、鹿殺しの掟を取消す譯には行きませんから、身替りに杉松の死骸を埋めまして、其上に鐘撞堂を建立いたしました。今に「十三鐘」と稱して大和の名所になつて居ります。十三鐘とは七つの子が明六つに死んだので「十三」と申すのださうです。

神鏡が手に戻りましたので、天子様のお目も明きました。

太宰の館

禁裏守護の任に當つてゐる太宰ノ少貳の館へ、今日は入鹿が御成になると云ふので、内外を



大判司

浄めまして、例の荒巻彌藤治が一々検分に廻つて居ります。それに今日は目出度い日だと云ふので、奈良の町へ入込んで居ります職人や商人や藝人共に受領を下さると云ふので残らずお呼出しになりました。

此日、大判事清澄には未明より出頭せよといふお達しでありましたのが、遅れてまゐりましたので、入鹿は御機嫌が悪く、「お前は此の塵に仕へるのが不服なのであらふ」と忌味を申しますので、

「拙者に限り左様な二心はございません」と云つて金打を致します。

「イヤ、こゝへお前を呼出したのは他の事ではない。あの采女の局は鷹の后にしようと思つてわたのだが、聞けば猿澤の池へ身を投げたといふ事であるが、それは嘘に違ひない、お前の子息の久我之助は局の傳役であつたから、その所在を知らぬ筈はない、お前もまた親子の中でその事實を知らぬ筈はない。何處、局を隠した」

と藪から棒に尋ねられて返答の仕様が有りませんから、知らぬ事は知らぬと申上るより外に致し方はございませんと斷乎言ひ切りましたので、「采女の事は追て詮議を爲ようが、その代り久我之助に出勤させよ」といふ論言ですから、畏まつてお請けを致しました。

入鹿はまた定高に向ひ「お前も満更知らぬ仲では無からふ」と取つても付かない事を申します。「何故なればお前の娘の雛鳥と久我之助とは疾から密通して居るではないか」

「これは又思ひがけない事で、大判事の家と私共とは大の仲悪でございませぬから、お互ひに出

入を致しません」

「それでは雛鳥に入内させよ」といふ難題。

入内とは妃として差出せといふことです。これもお受をしない譯には行きませぬから、畏りましたと申上げてしまふ。

久我之助は紀伊の香山に居ります。そこに大判事の別業が有るのです。雛鳥は大和の妹山に居ります。そこには太宰の下屋敷が有るのです。吉野川を隔て、庭と庭とが對ひ合つて居りますから、入鹿は彌藤治を呼んで、お前は「百里照」の眼鏡を持って、香久山の絶頂から兩家の様子を見張つて居れと言付けます。

吉野山

吉野山は今が花の盛りであります。丁度三月の節句で、太宰の下屋敷ではお雛様を飾つて女

中達が楽しんで居ります。雛鳥は身體の工合が悪いので、こゝへ出養生に来て居るのです。だが、それは嘘で、身體が悪いのではない、實は久我之助に逢ひたいと思つて、病氣を粧うてゐるのです。母はそれを知らない筈はありませんが、一人娘のことでもありますから、見て見ぬ振をしてゐるのでございます。

久我之助は毎日お経ばかり讀んで居ります。その悄悄した姿が此方の座敷から能く見えますので、雛鳥は耐り兼て川岸へ下りて行きましたけれど、瀬の音が高くて兎ても話などは出来ません。二人がヤキモキしてゐる處へ双方の親々が岸に沿うて同時にやつて来る。

大判事も定高も八重と一重を一つ枝に取結んだ櫻の花を持つて居りました。

大判事はいふ、伴がもし宮仕へを承知しなかつたら腹を切らせなければ成らぬが、さうしたら櫻の枝ばかりを流そふ、が、出勤すると云ふたら花を搥つて流しますぞと。

定高はいふ、娘がもし入内するのを拒みましたら、已むを得ませんから首に致します。さう



妹背山婦女庭訓

したら櫻の枝ばかり流しませふ。

併し、入内すると申しましたら花を搥つて流しませうと。

かういふ約束でしたが、雛鳥は母の言葉聞いて、久我之助へ操を立てる爲に自害する覺悟を致しました。母は娘の心

を能く知つて居りますから、たとへ承知すると云つても手に掛ける積りで居りましたが、もし此方が命を捨てたと云つたら久我之助の方でも義理を立て、腹を切るに違ひないから、せめて想ふ男の命なりと助けてやりたいと思つて、花を搦つて流しましたから、雛鳥は無事であるかと云うて、久我之助父子は安心いたしました。

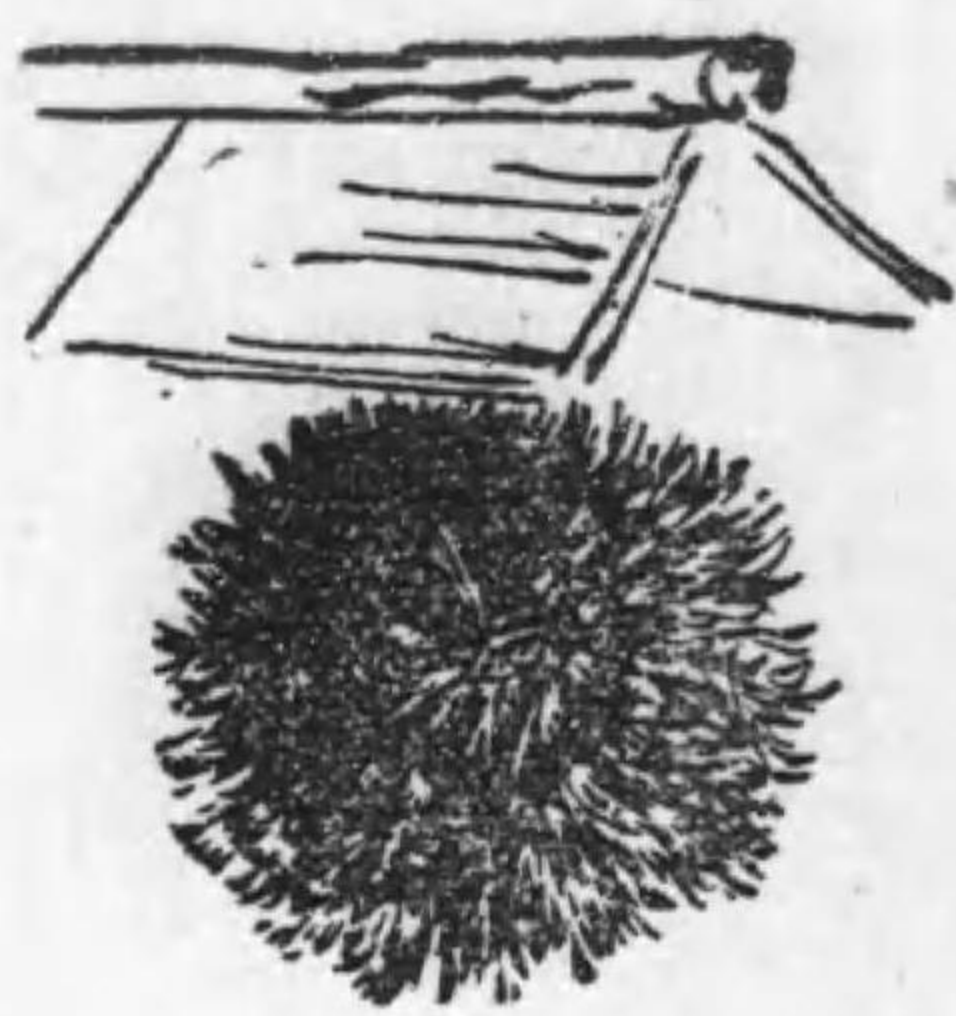
また久我之助の方でも同じ事で、此方が若し腹を切つたと云ふたら、彼方でも義理を立て、自害するに相違ない。それでは太宰の家も潰れて了ふし、雛鳥にも可愛想であるから、せめて命だけは助けてやりたいと思ひまして、花を搦つて流しましたのを見て、それでは久我之助は無事であるのかと雛鳥母子は喜びました。

お互ひに爾うした事とは知りませんが、久我之助が腹を切ると同時に雛鳥の首を打落しました。大判事は静かに普門品を誦んで居りますと、川を隔てた向うの部屋で女の泣き聲が致しますから、障子を明けて見ますと、無惨や雛鳥の首が無い。「やあ、手に掛けたのか」と驚きます

すと、定高の方でも「御生害をなされたのか」と云つて驚きました。

今更嘆いたとて仕方のない事ですから、此上は久我之助の息のある間に嫁入をさして遣らふと云ふので、お雛様の道具を流してやりますと、大判事はそれを飾つて、形だけの盃を致しまして、伴の介錯をしてやりました。

杉酒屋



淡海は三輪の里へ来て、名前を求と改め、烏帽子折に身を憔悴して、入鹿を討つべき折を狙つて居りますと、思ひがけない事から入鹿の妹の橘姫と戀仲になりました。併し求の方では其

れが橘姫であるとは気が付かなかつたのです。

求は長屋住居をして居ります。その隣に酒屋がございますが、昔は何の酒屋でも軒下に杉ノ

葉を圓めてぶら吊げて置いたものです。それゆへ杉酒屋と申すのですが、主人は後家さんで、お三輪といふ一人娘が有ります。このお三輪と求とは疾から出来合つてゐた處へ、橘姫が逢ひ

に來ましたので、あられもない口喧嘩が始まりました。



車に出まして、求を引立て、行かふとする、お三輪は遣るまいとする、三人で争つてゐる處へ、母親が歸つて來ました。

丁度其日は七夕の祭で、お三輪は白い苧環と赤い苧環とお星様へ上げて、二人は俱白髪まで添遂げるやうにと願つて居りました處です。お三輪は角を生しましたが、姫の方では此の下司女めと見くびりまして、高飛

母親は名主の所へ呼付けられて、お前の隣にゐる求といふ男はお尋ね者であるから取逃さぬやうにと言ひ渡されたので、此の態を見るより躍起となつて引止めましたから、姫は驚いて外へ駆出しますと、苧環の針を袂へ縫付けてあ



つたので、くるくると手繰り寄せられて求はその跡を追つて行きますから、お三輪も苧環の針を男の裾へ刺しましたので、これも同じやうにくるくると手繰り寄せられたので、母親は悔りして娘の帯を掴みますと、子太郎といふ奉公人が悪戯をしましたので、宛て途もなしに走つて行きました。

道行

野には薄や女郎花が咲亂れて居ります。橋姫と求とお三輪とは追つ追れつして夜の野路を走つて行きます。この場面は「道行」と云つて、人形浄瑠璃や歌舞伎芝居では美しい振事を見せるのであります。

御殿



入鹿は三笠山の御殿で酒盛をして居りますと、何處から来たのか田舎漢らしい大男が、しやちこ張つた上下を着け、大小を挿し、不恰好な態をして、臆面もなくのし〜と入つて來ました。この男は堺の漁師で鱈七といふ飄者です。己は鎌足どんの使に來たのだと云つて、貧乏徳利をそれへ突出しました。お酒です。鎌足公か

らのお土産なのです。そんな物を誰が取次ぎませう。



「厭なら己が呑む」と云つて立飲にゴブ〜。あ、甘え！

宮越玄蕃も荒卷彌藤治も呆氣に取られてゐる。一體、何の用が有つて來たのだ。別にはといふ用もないが、仲直りの挨拶に來たのだと云つて、入鹿と押問答をする。此奴文盲の癖に口巧者で、入鹿も遣り込められて苦笑ひをしてゐる。

鎌足は入鹿に降参をすると云ふ手紙を寄越したのであるが、鼻であしらつて受け付けやし

ません。鱧七は到頭人質に取られてしまひました。

人質に取られたつて平氣なもので、どしどし階を昇つて行つて、大小を投げ棄て、ゴロリと

横になつた。晝寢をする積りらしい。すると、

縁の下からズブ／＼と何本も槍を突出した。

何處を風が吹くと云つたやうに駭を振く。

そこへ官女が大勢出て来て、鱧七をおもち

やにする。鱧七は煩さがつて追立て、了ふ。

ふと見ると官女が忘れて行つた銚子がある。

こいつ怪しいなと思つたから庭先へあけて見

ると、草も木も見する間に萎れてしまふ。「アハ、ハ、用心深い奴だ」と笑つて居ります。

宮越玄蕃が家來を連れてやつて来る。手ん手に矢を番へて鱧七の周圍を取圍みました。「君の



鱧七

上意である、御前へまゐれ」と申しますと、「来いと云はないでも己の方から行くわい」さう云つて先立になつて、づか／＼と奥殿へ入つて行きました。

夜露に濡れて橋姫が戻つて來ましたので、腰元達

はお迎ひに出て痛はります。「おや／＼こんな物が付

いて居りますよ」と云つて苧環を手繰りますと、求

がくる／＼と舞込んで來ましたから、女中達が取押

へてしまひました。求は此の娘が橋姫であると云

ふことを始めて知りまして、悔り致しました。そし

て貴方は藤原の淡海様でありませうと星を指されましたので、もう生かしては置けないと云つ

て刀に手をかけました。また思ひ返して、もしお前が手柄を立て、呉れたら二世かけて夫婦

に成りませうと申しますと、橋姫は喜びまして、その手柄と云ふのは何ういふ事でございます



妹背山婦女庭訓

かと尋ねますと、兄の入鹿が村雲の剣を持つてゐるから彼れを取返してくれと申されます。姫

は道ならぬ事とは思ひながら戀には更へられま
せんから、承諾を致しまして、今宵管絃の御遊
がある故、その隙に盗み取らふと云ふ手筈をし
て、二人は別れ〜に忍んで行きます。



お三輪は苧環の絲が切れたので、途中で求に
はぐれて了ひまして、うろ〜しながら此の館
へ入つて來ますと、官女達に見付けられて種々
な事を尋ねられる。二十三四の、色の白い、綺

麗な男が此方様へまゐりはしませんかと云ふ。それはお姫様のお婿さんで、これから内祝言が
有るのだといふ。お三輪は悔りしまして、それでは彼の娘が私の大切な男を寝取つたのかと思

ふと、悔しくて〜耐りませんけれど、他の家でないから氣が怯けまして、喰てかゝる勢ひも
なく、仕方がありませんから、さう云ふ上つ方の御婚禮を見たいものと申しますと、官女達



は求さんと此の女と何か譯が有る事だと推
察しまして、面白半分になぶつてやらふと
思ひ、お婿様の顔が見たければ連れて行つ
て上げて宜いが、其代り式作法を一通り
知らなければ成らないからと云ふので、銚
子を持たせたり何かしてお盃の眞似事を致
します。序でに御祝儀の謡ひを歌つて聞か

せろと申しますから、それは飛んでもない事、私は田舎娘でございますから、店へ來る馬士の
歌より外存じませんといふ。それは面白いであらふ、サアお聞かせなさいと云つてせがみます

ので、極りが悪いけれど求の顔が見たい一心で「竹に雀」といふ馬士唄を歌ひまして、身振までして見せましたから、その様子が可笑しいと云つて皆な腹を抱へて笑ひこけましたが、

「馬士さん御苦勞」と言ひ棄て、去つて了ひますから、お三輪は悔りして私も連れて行つてくれと頼みますけれど、知らん顔をして居りますから、それでは約束が違ひませうと云つて泣喚いて取纏りますけれど、もと／＼からかひ半分に云つた事ですから誰も取上げてくれません、打つたり叩いたりして行つてしまひました。

お三輪は泣倒れて居りましたが、何うする事も出来ませんから、悄悄して戻りにかゝりますと、奥で官女達の囁し立て、御祝儀を諷ふのが聞へましたから、もう我慢が出来なくなりまして、死物狂ひになつてドシ／＼駈込んでまゐりますと、最前から此の様子をヂツと覗いてゐたのは鱧七であります。此の鱧七といふ男は實は漁師ではありませんが、金輪ノ五郎今國と云つて中臣家の勇士であります。何うかして入鹿を取つて押へようと云ふので、膽太くも一人入り

込んで来たのです。尤も尋常の手では到底討取れないのですが、先頃狩人の芝六が見付けました爪黒の女鹿の血を塗つた横笛を持つて居ります。これに疑着の相のある女の血を塗つて吹けば、入鹿は必ず眠りに落ちますから、その隙を狙つて討取らふと云ふ寸法なのです。

入鹿の父蝦夷は遅くまで子が有りませんでした。そこで春日明神へ願掛をした處、白い鹿が胎内へ入るといふ夢を見て出来ましたのが入鹿でございます。鹿がお腹へ入つたから「入鹿」といふ名を付けたのです。さういふ因縁が有りますから、爪黒の女鹿の血を絞つて調伏するといふ譯なのです。

そこで尙う一つの條件は「疑着の相のある女の血」といふ難かしい注文です。疑着の相とはマア執念深いと云ふやうな意味です。鱧七がヂツと覗てゐると、お三輪が丁度注文通りの女ですから、可愛想だとは思ひましたが、天下の爲には替へられませぬ、今、奥へ駈込まふと云ふのを引戻して、一突に致しましたが、その事情を聞きましてお三輪は喜んで死んで行きました

自分のやうな賤しい者が、淡海様といふやうな高位の方と言ひ交した事は何ぼう有難いことであるか、勿體ないやうな心持がして、今までの怨みも何も忘れてしまつたのであります。

三輪の死骸を何處へか葬つてやらふと思つて、幕を引裂いて背中へ括し付けて御殿を出ようとする時、侍が大勢で取押へにかゝりましたが、芥か何ぞのやうに黙散らしてしまひました。

入鹿は別殿に於て、橘姫の今様を見て居ります。樂の音が劉亮として響き渡る。其時檜垣の蔭に潜んでゐた淡海は、弓に矢を番へて、入鹿の胸板を目懸けて切て放しましたが、入鹿は苦もなく掴み取つて宿直の者を呼びましたから、宮越玄蕃、荒卷彌藤治が駈付けて左右から切つて掛ります。

姫は此の騒ぎに紛れて寶劔を奪ひ取り、振袖で隠して逃出さふと致しましたが、入鹿に見付りましたから、それを庭先へ投出しますと、淡海は手早く拾ひ取つて二人を相手に切結びながら後へくと退つて行きますから、姫はハラ／＼して心配して居ります。

入鹿は雀でも掴むやうに姫を捻伏せて、カラ／＼と笑ひました。折角奪ひ取つたと思つたの



は偽物であつて、鎌足父子を釣寄せようと云ふ計略だつたのです。本當の十握の劔は入鹿が常

に腰に佩してゐたのであります。姫は驚きまして、思はず兄の腰へ手を懸けようとする、入鹿は一太刀浴せました。

何處からとなく笛の音が響いて来ますと、不思議や恍惚として眠つて了ひましたが、其の途端入鹿の手に有つた寶劔がする／＼と脱けて出まして、庭先を流れてゐる川の中へさんぶり落込みますと、忽ち水煙を揚げ、霧を吐いて泳いで行くさまは宛ら龍のやうに思はれますので、橘姫は驚きまして、傷手も忘れてしまひ、慌て、庭先へ駈下り、自分も續いて川の中へ飛込み、拔手を切つて其の惡龍を追懸けました。

龍は終に水中より跳上つて、虚空遙かに飛行しましたが、「かたらひ」山の絶頂へ行くと、そこに一味の人を集めて入鹿征伐の評定をしてゐた鎌足公の手元へする／＼と下りて行きましたから、鎌足公は少しも驚きませんで、それを袂で受けて見ますと、擬ふ方もない十握の劔でありました。

夜は森々と更けて行きます。そよ吹く風に連れて法螺貝太鼓の音が次第／＼に近づいてまゐります。鎌足公の軍勢が攻寄せて来たのです。

金輪ノ五郎と玄上太郎とが右左から切懸りましたが、入鹿はガバと跳起きまして、阿修羅のやうな勢ひで鎌足公に飛懸りましたから、二人はヤツと云つて左右から組付いたが、入鹿は物の數とも致しませんで、大地へ叩き付けて、ギユウと壓潰して居ります間に、鎌足公は後へ廻つて、家の重寶である鎌でもつて入鹿の首を掻切りますと、あら怖ろしや、虚空に舞上つて火焔を吹掛けながらくる／＼と輪を描いて飛廻つたといふ事です。

志賀の宮

翌年の春、都を近江の志賀へ移されました。采女の局は皇后様になりました。橘姫は名を豊代姫と改めて淡海公の夫人に直されました。

大判事清澄は武家の司となり、三作を養子にして志賀之助清次と名けました。玄上太郎、金輪ノ五郎、太宰の後室貞高等何れも高祿を賜はつて家は富み榮へて、今日まで繁昌でございます。

(とはり)

昭和四年十月二十日印刷
昭和四年十月廿五日發行

解説
妹背山婦女庭訓

不許
複製

編者 玉井清文堂編輯部

東京市神田區表神保町十番地

發行兼印刷者 玉井清五郎

發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話神田二二三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

324

492

終

